

ひょうごの 遺跡

112号

(公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 兵庫県立考古博物館内 TEL.079-437-5561 FAX.079-437-5591 URL:<https://www.hyogo-ctc.or.jp/>

令和6年度発掘調査成果速報

～古代寺院はどこにある？～山角廃寺

～花文を刻む緑釉陶器～玉津田中遺跡

～竹やぶの中から知られざる古墳を新発見！～神野北山遺跡

～古代役所からの漂流物？緑釉陶器が出土！～北王子遺跡

公開活用の現場から

山角廃寺の公開活用

ひょうごの掘り出しもの

第10回 瓦の形をしたお皿

山角廃寺調査区遠景

古代寺院はどこにある？

やまかど
山角廃寺（加古川市平荘町山角）

動画はこちらから

山角廃寺は加古川西岸の氾濫原に面した段丘上の、旧平荘小学校周辺に立地します。校庭に保存されていた塔の心柱を支える礎石（塔心礎）に加え、近隣で出土した数点の瓦から、古代寺院の存在が想定されてきました。また遺跡の山手には、中世に隆盛を誇った印南山報恩寺があります。校舎建設に先立ち、発掘調査を行いました。

今回の発掘調査では、古代の掘立柱建物2棟（SB01・02）、中世の掘立柱建物2棟（SB03・04）や溝（SD014・SD427）、また近世の井戸1基（SE341）や暗渠（SD341）などを検出しました。空白期間はあるものの、当地に古代から中世にかけて寺院関連施設の存在が明らかになりました。ここでは、主要な調査成果について紹介します。



掘立柱建物（SB01・02）（北から）



出土した古代の軒瓦

古代寺院が近くに存在？

掘立柱建物2棟はいずれも調査区の北東端にあり、一部柱穴が重複しています。切り合い関係からSB01のほうが古いことがわかりました。柱穴の掘形は古代に特徴的な方形ですが、柱穴の並びは通常真北方位をとる古代寺院とは異なり北東方位を向っています。

古代の建物跡から遺物は出土しませんが、古代の瓦が中世の遺物とともに溝（SD427）などから多数出土しました。なかでも5点の建物の軒を飾った瓦（軒瓦）は花卉が一つの蓮を施した文様（単弁蓮華文）から奈良時代のものと考えられます。こうした瓦の量や種類からみて、寺院が調査地周辺にあった可能性が高まりました。



今回の調査地と報恩寺（右上）（南西から）



塔心礎

中世以降の報恩寺関連遺構

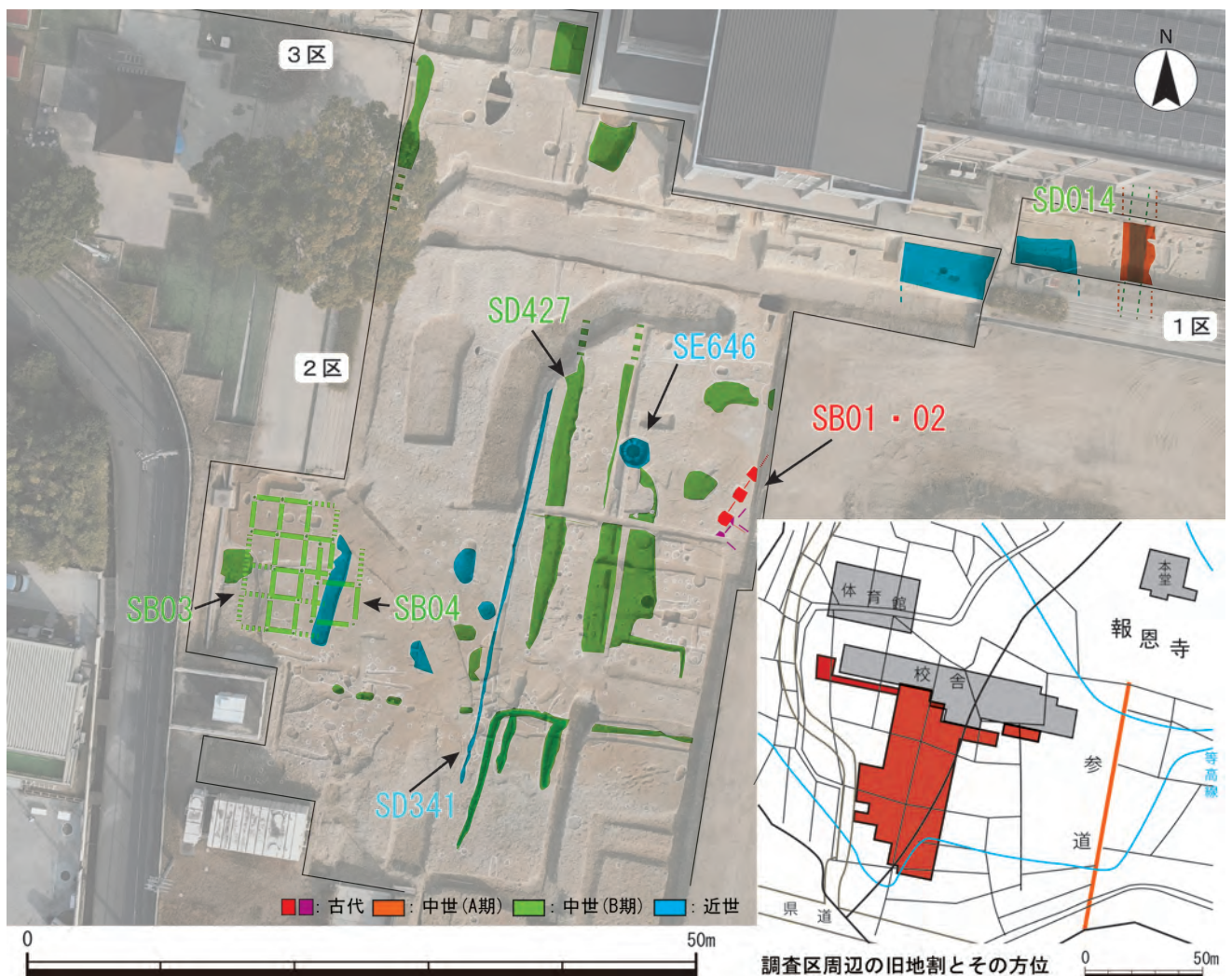
掘立柱建物2棟(SB03・04)はいずれも調査区西側中央にあり、建物の主軸方向は北北東方位をとります。このほか溝の多くが北北東方位をとります。なかでもSD014は北方位(A期)が北北東方位(B期)へ付け替えられています。北北東は現在の報恩寺参道の方位と同じであることから、こうした掘立柱建物や溝は報恩寺に付属する施設であったと考えられます。

遺物では食器や調理具、貯蔵具といった日常的に使用された土器が多く、鎌倉時代後期～室町時代中期を中心としています。これは報恩寺が隆盛した中世の時期と重なります。また、暖房に用いる風炉や喫茶に^{ふうろ}^{きつさ}関わる火鉢^{ひばち}が出土しており、寺院ならではの行事が行われていたと考えられます。

近世には中世の地割りを踏襲した暗渠のほかに、石組みの井戸が見つかっています。近代には学校となり、周辺から塔心礎が運ばれ、校庭の端に置かれていました。発掘調査に伴い、この塔心礎は報恩寺に移設されています。近くにお立ち寄りの際は、大きな礎石に古代寺院を感じてみてください。(調査第1課 椿野智之)



SD427 (北西から)



調査区平面 (空測写真)

花文を刻む緑釉陶器 玉津田中遺跡(神戸市西区平野町下村)

玉津田中遺跡は神戸市西区玉津町から平野町にかけての明石川左岸に広がります。これまでの調査で弥生時代を中心に、様々な時代の遺構・遺物が発見された広大な遺跡です。

当センターでは、令和元年度から一般国道2号(第二神明道路)建設事業に伴い、断続的に調査を行ってきました。

令和6年度の調査区(4・5区)は遺跡北側の段丘上にあります。隣接する令和元・3年度の調査区(1～3区、P10～12区)では、奈良～鎌倉時代の掘立柱建物等を確認しています。このうち、掘立柱建物3は8～9世紀、6は12世紀代、8は8世紀代のものと考えられています。

4区や5区の西側は、現在の道路を造る際に大きく掘削されており、見つかった遺構は溝や柱穴等で少数でした。

5区の東側では多くの柱穴が確認され、埋土からは古代から中世の土器が出土しました。このうち、SP122では古代の須恵器杯、SP116では古代の須恵器碗、SP229では古代の土師器甕が出土しました。

また、この他の遺構としてSX170やSX195があります。

SX170は平面長方形の土坑で、一辺が3.5～4.0m、最も深いところで約1.6mあります。底の方には礫が厚く堆積し、水が溜まる状態で、井戸のようなものと思われます。中からは古代の土師器皿や須恵器杯・鉢のほか、製塩土器、緑釉陶器の碗、灰釉陶器とみられる長頸瓶が出土しました。このうち緑釉陶器の碗は9世紀代のものとみられ、内面には花の文様(陰刻花文)が刻まれています。他にも古代のものとみられ

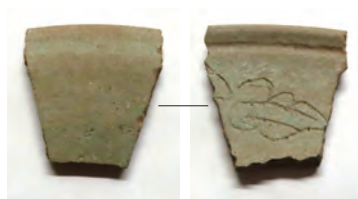


今回の調査範囲とその周辺(南西から)

る瓦片も出土しました。緑釉陶器、灰釉陶器、瓦は寺院や役所跡等で出土することの多い遺物でもあります。

SX195は土坑墓と考えられ、平面長方形の掘形(約2.0m×1.3m)の内部に土坑(約1.2m×0.8m)があります。深さは約0.3mで、中からは土師器碗、須恵器杯・碗、黒色土器碗等が出土しました。

SX170の遺物は9世紀代、SX195の遺物は10～11世紀代のものが中心です。今回の調査で、すでに見つかった掘立柱建物以外にも、それらと同じか近い時期に井戸や墓といった施設が存在したことがわかりました。SX170で出土した特徴的な遺物の存在と合わせて、今回の調査成果は古代の玉津田中遺跡、とりわけ段丘上のエリアの状況を復元する手がかりと言えます。(整理保存課 岡田大雄)



▲ SX170で出土した緑釉陶器

◀【参考】灰方2号案灰原(京都市西京区)出土緑釉陶器(S=1/3)

(京都市埋蔵文化財研究所2010『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-8』pp.37図38-246)

出土した緑釉陶器と類似例



調査区平面オルソと主な遺構 (S=1/600、ベースマップには国土地理院航空写真を使用)

竹やぶの中から知られざる古墳を新発見！

かん の きた やま
神野北山遺跡他（加古川市神野町神野）

神野北山遺跡は印南野台地の縁辺部に位置しています。今回は加古川市神野用地（区画E）の開発に伴い、長細いトレンチ調査を行いました。

その結果、竹やぶの中から今まで知られてなかった直径15mほどの古墳の存在が明らかになりました。古墳は幅1.5～2.0m、深さ30～40cmの溝に囲まれた^{えんぶん}円墳で、地山基盤層の上に人為的に盛土されている地層が観察されました。最も残りのよいところでは溝の底から1.1mの高さまで土が盛り上げられています。

今回の調査では埋葬施設は見つかっていませんが、古墳時代の人々が^{せきしつ}石室を構築するのに掘りくぼめた穴や、後世の^{かいこん}開墾で石室の石材を抜き取った穴や割られたと考え



周濠（手前の凹み）と盛土（奥側）

られる石材の一部が確認されたことから、谷のほうに開口する横穴式石室を備える古墳と推定されます。

古墳の他には人々の暮らした痕跡などは全く見つかっていません。調査地点は地盤の安定した台地上にあります。水を確保するのが難しかったのかもしれませんが。

（調査第1課 上田健太郎）

古代役所からの漂流物？緑釉陶器が出土！

きた おう し
北王子遺跡（明石市北王子町）

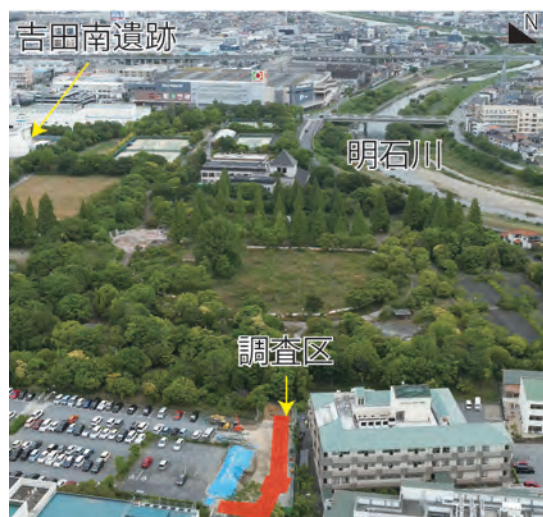
北王子遺跡は、明石川右岸の^{ちゅうせきち}沖積地に立地している遺跡です。兵庫県立がんセンター敷地内雨水排水管設置工事に伴い、調査を行いました。

調査の結果、古墳時代後期の水田、室町時代の^{すきみぞ}鋤溝を確認しました。この時期、周辺には田畑が広がっていたと考えられます。一方で、古墳時代中期の竪穴建物跡や奈良～鎌倉時代の柱穴が確認できたことから、居住域であったと考えられます。

遺物では^{はがま}羽釜や^{いいだこつぽ}飯蛸壺のほかに、洪水堆積層から^{りょうわん}緑釉陶器や須恵器稜碗、平瓦など古代官衙を想定できるものが出土しました。こうした洪水堆積から出土した遺物は明石川のやや上流側から流されてきたものの可能性があります。

今回の発掘調査地点は古代明石郡の役所と想定されている^{よしだみなみ}吉田南遺跡（神戸市西区）の約500m下流にあり、こうした役所からの漂流物と考えられます。

（調査第1課 椿野智之）



調査区遠景（南から）

～山角廃寺の公開活用～

山角廃寺（p 2～3）の発掘調査期間中には、調査の様子やその成果を地元の方々にも身近に感じてもらえるよう、現地での発掘調査体験会や現地説明会など、様々な取り組みを実施しました。

発掘調査体験会は令和7年1月13日に開催し、計22名の参加がありました。寺院に関連する遺跡とあって、瓦など比較的大きな遺物が見つかり、参加者はスコップや刷毛を使って丁寧に掘り出しました。参加者の多くは地元の方で、特に小学校を卒業した親が子どもを連れて参加するなど、親子一緒に小学校での思い出を語りながら楽しんでもいました。

現地説明会は1月25日に実施し、地元住民を中心に計112名の参加がありました。発掘調査場所が小学校跡であったこともあり、見学者からは「この卒業生で、今日は何十年ぶりに来た。」「子どもの頃はここでよく遊んでいた。」など、当時を懐かしみながら調査の成果を熱心に聞いていました。

また1月24日には、調査地の近辺に所在する両荘みらい学園（加古川市平荘町）

の児童らによる見学会を行いました。両荘みらい学園は平荘小学校などを統合して新設された小中一貫校であり、中には統合前に平荘小学校で学んでいた児童もいました。見学会では実際に出土した遺物に触れる機会を設けました。児童が調査員に質問する場面もあり、興味・関心の高さに驚かされました。

今回は発掘調査場所が小学校跡ということもあり、地元での関心の高さを改めて感じることが出来ました。今後とも、地域の皆様に様々な形で公開活用に取り組んでいきたいと思っています。

（調査第2課 垣内 翼）



発掘調査体験会の様子



現地説明会の様子



両荘みらい学園児童の見学

ひょうごの 掘り出しもの

～第10回～



ARはここから

瓦の形をしたお皿

(明石市 明石城武家屋敷跡)

瓦の形を模したおもしろい形のお皿で、屋根瓦に興味をもつ私にとってはお気に入りの一品です。皿の側面の板状に垂れた部分に唐草文を彫り込み、文様部分の左側に瓦同士を重ねるために出っ張らせた特徴的な部分も表されています。江戸時代後期（18世紀以降）に普及した軒棧瓦の形をうまくお皿に取り入れています。料理を盛り付ける真ん中の部分は丸くくぼめられて不安定なため、底面にかわいい巻貝形の突起を3箇所貼り付けてあったとみられます。また、底には楕円形の枠に「まいこ」と書かれた小さな印も押されていることから、舞子焼であることが分かります。

舞子焼とは江戸時代後期から大正頃まで神戸市垂水区の舞子付近で生産が行われた京焼系の陶器です。茶碗や土瓶などの標準的な日常雑器も作られていますが、今回紹介した皿と同じような、生き物や器物をかたどった、趣きのある焼物もしばしば見られます。

このお皿が出土したのは幕末期に御馬廻を勤めた立田氏の屋敷地で、明治に入ってもそのまま住み続けられていました。三十俵三人扶持の禄高からするとかならずしも裕福ではなかったと思われませんが、このような焼物から個々の武士（あるいはその後裔）の暮らしの様子をかいまみることができます。

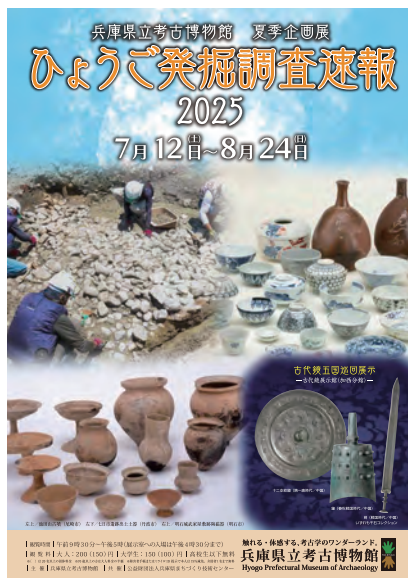
(整理保存課長 池田征弘)



明石城武家屋敷跡出土の舞子焼

本誌に掲載の遺跡

- ① 山角廃寺
加古川市平荘町山角
- ② 玉津田中遺跡
神戸市西区平野町下村
- ③ 神野北山遺跡
加古川市神野町神野
- ④ 北王子遺跡
明石市北王子町
- ⑤ 明石城武家屋敷跡
明石市桜町



編集後記

ひょうごの遺跡も創刊から41年目に突入し、本号では令和6年度に行った発掘調査について紹介しました。奇しくも、加古川と明石川の流域に展開する遺跡となりました。次号では特集を予定しています。お楽しみに！（調査第1課 椿野智之）

『ひょうごの遺跡』バックナンバーはこちら！

https://www.hyogo-koukoku.jp/modules/book/index.php?action=PageList&category_id=3

<https://www.hyogo-ctc.or.jp/iseki/>

1～82号

考古博物館HP



83号～

CTC HP



公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
Hyogo Construction Technology Center for Regional Development